

お知らせ

 弊社代表ブログ 開設のお知らせ

ミュージアムに展示されている資料や作品の多くは、学芸員の解説が不可欠です。それが添えられていなければ、私たちはその価値を正確に理解することすら困難。私たちミュージアムファンは、学芸員の懇切丁寧な案内によって歴史や芸術の魅力にふれていることになりす。

では、そんな博物館の仕事は、社会から正当な評価を得ているのでしょうか。私は、1年間に200館前後のミュージアムを訪問していますが、常々、そんな疑問を抱えております。と言うのも、お恥ずかしい話ですが、2004年にこの業界に入るまで、私自身も博物館学芸員がどんな仕事なのか、ほとんど知らなかったからです。

個人的な話で恐縮ですが、大学卒業後、私は大手銀行に就職しました。当然のことながら、行員時代は預金や融資、財務など、早朝から深夜までお金の話に終始する毎日を送っていました。そんな生活から一転、全国の博物館に通う仕事へ。14年にわたる銀行員生活ではマナーについて一端の専門家気分でしたが、今の仕事は17年経っても学芸員の知識や技術、そして地域のたからを次代に継ぐという矜持に圧倒されるばかりです。

この仕事に就いた後の私は、学芸業務の重みを心の底から実感することができました。しかしながら、それ以前は、名称の印象から漠然と思い描くのみで、それがなければ人々が

「その資料が何なのか」を認識さえできない仕事、資料や作品など実物資料の基礎的な調査・研究・記録・保存のすべてを担う仕事であるとは理解していませんでした。そして、恐らくは、以前の私のような方が多数派なのではないかと思えます。

学芸員の皆さんにお話をうかがうたびに、「ふだんから裏方として汗をかいてくださっているのだな」と頭が下がる思いに包まれます。そんなミュージアムの努力を伝えたいと考え、先ごろ、個人名義のブログを開設しました。業界専門のシステム会社の企画・営業・サポートという立場から、元・銀行員の中小企業経営者という立場から、そしてひとりの「ミュージアム好きおじさん」の立場から、気の赴くままに書き綴っていきたくと思っています。

投稿内容の一貫性もなく、とりとめないブログになると思いますが、もしよろしければ、時々アクセスしていただければ嬉しく思います。どうぞよろしく願いいたします。(内田剛史)

 代表・内田のミュージアムブログ
<http://www.waseda.co.jp/president-blog>



 編・集・後・記

弊社オフィスの最寄り駅は、JR山手線の「高田馬場」駅です。ご存じの方も多いと思いますが、ホームで鳴る発車メロディは、アニメ『鉄腕アトム』の主題歌。頭の中で一緒に歌いながらも「なぜアトム？」と思われるかもしれませんが、実はアトムは「高田馬場にある科学省」で誕生した設定なのだとか。アニメーション制作会社・手塚プロダクションは各地にスタジオやオフィスを構えています。本社は現在も高田馬場にあるのです。つまり、日本の漫画＆アニメ界の巨匠・手塚治虫ゆかりの地ということで、当然の選曲と言えるわけですね。

今回のMAPPS Pressでは、ミュージアム主催のオン

ラインツアーを特集しました。私も参加させていただきましたが、コロナ禍での苦肉の策が逆にデジタル時代の新たな可能性を示した格好ともなり、実に楽しい時間を過ごすことができました。

今回ご紹介した無人の展示ガイドやNFCタグなどもそうですが、これらは数十年前の手塚作品でワクワクさせられた「未来のツール」に近いもの。ここから先も、きっとかつては夢の夢だったアイデアが次々と実現していくことになるのでしょう。数十年後のミュージアムは、どんな姿になっているのだろう…と、ホームでメロディを口ずさみながら「アトムの時代」を想像するのです。(U)

 www.facebook.com/wasedasys
早稲田システム開発株式会社

MAPPS press

News Letter from MAPPS
2021.04
No.16

頑張れ、ミュージアム。



発行元：早稲田システム開発 株式会社
東京都新宿区高田馬場4丁目40番17号
TEL.03-6457-8585 FAX.03-6279-3333
www.waseda.co.jp/

CONTENTS

 参加レポート
ミュージアム体験の新たなカタチ!?
「オンラインツアー」参加レポート
① ちひろ美術館
② 彦根城博物館
③ 博物館明治村

 ミュージアムITピック
ポケット学芸員 導入事例
松江歴史館

 ミュージアムIT屋さん、現場を往く!
慶應義塾ミュージアムコモンズ
グランド・オープン直前 内覧会

 お知らせ
弊社代表ブログ 開設しました!

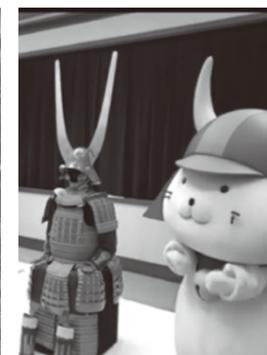


ミュージアム体験の新たなカタチ!? 「オンラインツアー」参加レポート



Part 1
ちひろ美術館

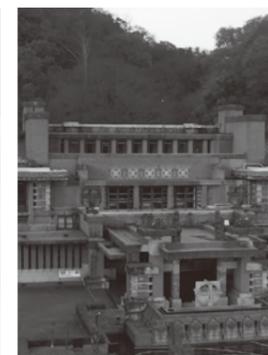
新型コロナウイルス感染拡大の影響で、「働き方」が一気に変わった今日この頃。弊社でも、会議や打ち合わせ、操作説明などをオンラインで行う機会が増え、スタッフの在宅勤務の比率も高まりました。プライベートな時間においても「オンライン飲み会」が浸透しています



Part 2
彦根城博物館

が、最近では結婚式までリモートで開かれることもあるとか。マスクの着用や手指の消毒も含めて、わずか1年で私たちの日常風景は大きく変貌しました。

一方、画集で見た憧れの芸術作品や、本で知った歴史的資料の実物と相対できるミュー



Part 3
博物館明治村

ジウムは、「リアルな場」であることが前提。昨今の非接触社会とは対極に位置する存在とも言えるでしょう。バーチャルミュージアムのような試みはずいぶん前からありましたが、それらはWEB上の特別な企画的な位置づけで、多くの場合は日常の展示活動とは異なる文脈で展開されてきました。そう考えると、唐突な形となったオンライン社会の到来は、まさに青天の霹靂。他業界に比べて、IT化そのものに難しい側面を持つミュージアムの業界は、果たしてうまく対応することができるのでしょうか。

何ともモヤモヤした日々を過ごす中、新しい動きも。今年に入って、いくつかの館で有料のオンラインツアーの開催が相次いでいるのです。実際に参加してみると、いずれも想像をはるかに上回る満足度。というわけで、今回のMAPPS Pressでは、ユーザーよりよく体験レビューいたします!

ミュージアム体験の新たなカタチ!? 「オンラインツアー」参加レポート



Part 1
2021.02.13

ちひろ美術館

まずはこちらから。緊急事態宣言が明け前の2月13日(土)に開催されたオンラインツアーイベント、【東京・長野2つのちひろ美術館から送る～花と子どもの画家『いわさきちひろ』美術館学芸員による人数限定ツアー】です。

いわさきちひろと言えば、子どもを描いた温かみに溢れたタッチがあまりにも有名ですね。今回は幸運にも予約をとることができましたが、追って届いたポストカードがまた素敵でした。その美しい絵にいつそう期待感を膨らませつつ、イベント当日を迎えます。

スタートは午前10時30分、予定の所要時間は約1時間。この季節にしては比較的暖かい日で、ペランダから差し込む陽光の中で飲み物とポストカードを手元に置き、準備万端でPCを起動します。



一度見たら忘れないあのタッチの秘密に迫る!

ご存じの通り、ちひろは、キャリアを通じてたくさん子どもたちを描いています。ひとことで子どもと言っても、1か月の新生児も、つかまり立ちを始める10か月ほどの赤ちゃんも、モデルなしで描き分けることができたとか。きっと、日ごろから細やかに見守っていたからこそその技術なのでしょうね。今回のツアーでは、ご本人の写真も紹介されましたが、穏やかな笑顔がとても印象的。作品の雰囲気とそのまじり重なります。

手元のポストカードを眺めたり、作品

に関するクイズにチャット機能で答えたり。オンラインの進行ながら、すっかり美術館にいるような気分です。複数の学芸員が、自らお気に入りの作品について思い入れたっぷりに語ってくださるので、こちらもつい「その気」になります。ポストカードを見比べながら、自分なりの「推し」を決めてみました。

私のお気に入りには、『暖炉の前で猫を抱く少女』という作品です。室内の温かさ、少女に抱かれる猫の今にも動き出しそうな様子、籠いっぱいのおもちゃたち

…。作者と一緒に眺めているような感覚で、幸福感が自然に広がります。素晴らしいですね。

さて、ツアーのプログラムに戻しましょう。ちひろの絵と言えば、一度見たら忘れないあのタッチ。その技法の特徴について、実演付きの説明もありました。絵筆にたっぷり水を含ませて、余白を最大限に活かすのがポイント。代表作のひとつとして有名な『わらびを持つ少女』で目を引く洋服の白い襟も、この「余白効果」なのです。また、作品の随所に見られる水

彩らしい「滲み」は、実は計算されたものなのとか。このあたりは、モニター画面にグッと顔を近づけて、もう食い入るように見入ってしまいました。

さて、場面は「ちひろ美術館・東京」から「安曇野ちひろ美術館」へと場所を移します。まさに長野県へと瞬間移動するのはオンラインのツアーならではの、テレビ番組的なエンタメ性も。参加者を飽きさせない構成です。

美術館が立地する長野県松川村は、ちひろの両親が暮らした土地で、ちひろ自身も幼いころから何度も訪れたそうです。ツアーでは美術館だけでなく、村の名所ともなっている広大な安曇野ちひろ公園の案内も。園内には、ちひろの絵で知られる黒柳徹子さんのベストセラー『窓ぎわのトットちゃん』の世界を再現した「トットちゃん広場」があるのですが、そこに置かれた電車の教室の様子もバッチリ

と疑似体験。本当に、ちょっとした観光気分を味わうことができました。

ツアーを通して感じたのは、登場した学芸員の皆さんが様に笑顔で、穏やかな語り口調だったこと。ちひろ作品を毎日見ておられることも関係するのかな…と想像し、ウチのオフィスにも一枚飾ろうかと思案中。本当に優しい気分になれる絵ですから、きっと仕事の空間でも空気を和らげてくれるはず。と



オンラインツアーの体験後、東京館を実際に訪問

ツアーが実施された日は、臨時休館の期間中。その約1か月後、「ちひろ美術館・東京」は無事に営業再開へと漕ぎ着けています。場所が近いということで、家族を連れて出かけてきました。オンラインツアー後に改めて実物の作品を見て、ふたつほど改めて気付いたことがあります。

ひとつは、作品のサイズが思いのほか小さいこと。この大きさの中で、子どもの成長や細かい仕草などをあのタッチで描き分けるのですから、その技量の凄まじさが伝わってきます。もうひとつは、「すべての子どもに幸せであってほしい」という願いの強さ。戦争を題材にした作品などは、「この天使のような子どもたちを戦禍の中に置いてよいのか」という強烈なメッセージに思わずたじろぎ、打ちのめされそうになります。

前述の通り、ちひろの絵は『窓ぎわのトットちゃん』に使われていますが、現在はユニセフ親善大使としても活躍中の黒柳徹子さんは、実はちひろ美術館の館長を務めておられます。今年、戦後を代表する大ヒット作でもある同作の出版から40周年に当たる年。鑑賞体験の感動が続くようにと購入した文庫本と画集を手元に、清々しい気分でご覧になりました。



ミュージアム体験の新たなカタチ!? 「オンラインツアー」参加レポート

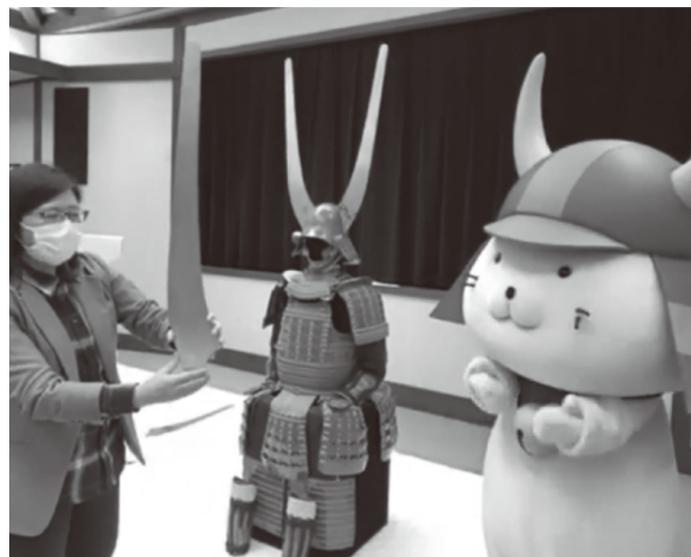


Part 2 彦根城博物館

2021.02.13

2月13日(土)は、実はミュージアム主催のオンラインツアーのダブルヘッダーでした。午後に参加したのは、【甲冑ファン必見! 彦根城博物館学芸員による「井伊の赤備え」解説付きオンラインツアー】です。こちらも運よく席を確保すると、事前に資料が届きました。刀剣や甲冑のカラー写真がふんだんに掲載された冊子と、彦根の銘菓『埋れ木』…いきなり満足度がMAXです!

オンラインツアーは、館の説明からスタートするオーソドックスな立ち上がり。こちらの博物館は、彦根城の表御殿の跡地に復元を兼ねて建設されたのですが、上空から俯瞰できる地図が画面に表示されると、思わず声が出ました。急いでお城と博物館の位置関係をチェックすると、館がとても重要な位置にあることがリアルに分かります。これまで何度も訪れているのですが、これは新たな発見となりました。



甲冑の違いをひと目で見分ける知識をゲット!

さて、今回のイベントは、「井伊の赤備え」というテーマのもとに進行します。井伊家の甲冑は、兜や胴、頬当に袖、籠手に至るまで、すべてが朱塗り。これを藩主から士卒までの全員で統一されていたのだそうです。そうすると、想起するのが現代の団体競技ですよ。野球やサッカーをはじめ、チームスポーツでは結束力を高めるために同じユニフォームを身にまとうのが古今東西の鉄則ですので、「赤備え」はさぞ藩主たちの士気を高めたことでしょう。

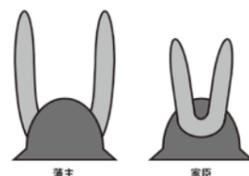
画面には、武器・武具担当の学芸員が登場。甲冑の実物を示しながらの詳しい解説が始まりました。なお、こうした甲冑は、コンディション管理の観点から、そうそう何度も展示できるものではないのだとか。それを詳しく見られるだけでもお得感が満点なのですが、優越感に浸る間もなくエピソード紹介がどんどん進んでいきます。

個人的な話で恐縮ですが、各地の博物館で甲冑を見るたびに思っていたことがあります。甲冑は武具、即ち戦で身に着けるもの。人体の急所にあたる箇所は嚴重に覆いますので、当然、重量が増します。そんなものをフル装備の上で戦場を駆けた昔の武士たちは、いったいどれほどの体力の持ち主だったのか…と。

オンラインツアーでは、そんな積年の疑問が甲冑の重量変化に関するクイズとして取り上げられました。家康に仕え、いわゆる「徳川四天王」の一角として勇名を馳せた井伊直政が身に付けていた甲冑の重量は約27キログラム。これに対し、幕末期の江戸幕府で大老を務めた井伊直弼の甲冑は約13キログラム。両者を比べると、何と半分以下になっているのです。その理由は、ふたりが生きた時代の世相にあります。直政の生誕から直弼の没年までちょうどほぼ300年の開きがありますが、天下泰平

の世では甲冑は実戦から遠ざかっていたため、皮は軽鉄板は薄くと軽量化されたわけですね。ということは、直弼も、直政の装備を見て「こんな重いものを着けて戦っていたのか」と驚いたのでしょうか。実に興味深いですよ。

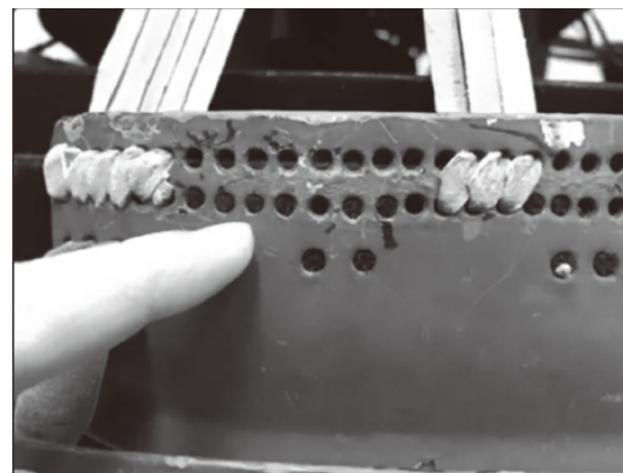
こうして掘り下げてくださると、甲冑は本当に面白い世界です。たとえば、藩主と家臣では、甲冑にひと目でわかる違いがあるのだとか。よく兜に付いている角のような装飾、あれは天衝(てんつき)と呼ぶそうなのですが、横から高く上に伸びる(天衝協立)のが藩主用、小ぶり前に付いているのが家臣用とのこと。絵に描いてみると、こんな感じですよ。



甲冑の実物解説では、展示室ではなかなかお目にかかれない細部についても、じっくり見ることができました。写真左は、初代直政の甲冑を用いた、胴から腰の部分の覆うように吊るされている草摺

(くさずり)の解説風景。写真右は、13代直弼の甲冑で、少し劣化が進んでいる紐を慎重に裏返すと、そこには金色の布で作られたポケットが。これ、何だかお分かりですか?

実は、何と、「鼻紙入」! 紙に限らず薬品や小物などを入れていたようで、胴の横に付いていることも多いそうです。甲冑には、こんな細やかな機能性が確保されていたのですね。



実は本当に貴重な機会だった今回のツアー

実に興味深い話題の数々を楽しみつつ、カメラは展示室内の甲冑の展示コーナーへと移ります。説明を詳しく聞いて基礎知識を付けた上で合戦図を眺めると、「赤備え」の軍勢がいかに強そうに見えて不思議な気分です。次にお邪魔する機会には、絵の細部を確認するために虫眼鏡を持参しなければ。

カメラが再び甲冑の現物に戻ったところで、今回の特別ゲストが登場。彦根と言えばこのお方、ゆるキャラ界のスーパースター「ひこにゃん」さんです! 見慣れた雄姿で愛嬌を振りまきますが、じっくり学んだ直後だけに、やはり甲冑が気になりますね。「お、これは天衝協立。ひこにゃんってば、藩主様だったのね」な

どと、ひと目で見抜けるようになった自分に感心したり。

* * * * *

甲冑だけでもこの満足度なので、やはり博物館は楽しいですね。ちなみに、オンラインツアーの全プログラムの終了後にも、聞き逃さないお話が。博物館の資料はどれも、極めて丁寧な扱いが必要で、展示のためとは言え、出し入れは慎重を期さなければなりません。中でも甲冑は、漆や紐などの経年劣化が進んでいるものが多くあり、組み立てたり解体したりするわけですからその危険は高く、神経を使う作業だそうです。甲冑を手を取

りながらとてもこやかに解説してくださっていましたが、実は大変な緊張を伴うイベントだったのかもしれない。今回は、日頃は別々に保管されている部品から甲冑を組み立てるシーンを見ることができましたが、画面越しでもリアルタイムでここまで楽しめる機会はほとんどないはず。オンラインであっても、本当に貴重な「体験」だったことを痛感するエピソードでした。

ミュージアム体験の新たなカタチ!? 「オンラインツアー」参加レポート



Part 3
2021.02.06

博物館明治村

このふたつのオンラインツアーの前週、もうひとつ注目の企画がありました。博物館明治村(以下、明治村)のオンラインツアーです。こちらは参加できなかったのですが、ツアーの様子が想像できるアーカイブ映像が販売されていると知り、早速購入。休日のリビングで、じっくりと鑑賞しましたので、併せてご紹介しましょう。

ライト建築の魅力をリアルに感じる映像体験!

最初に見た動画は旧・帝国ホテル中央玄関、通称「ライト館」をテーマとしたオンラインツアーです。ライトとは、もちろんアメリカが誇る歴史的な建築家、フランク・ロイド・ライトその人。自然と建築の融合、水平線と重なる直線の美…彼の設計思想である「有機的建築」は、あまりにも有名ですね。こちらの建物は、大正12年(1923年)に竣工し、老朽化で昭和43年(1968年)に解体された「東洋の宝石」こと帝国ホテル新館(つまり2代目の建物)の玄関部分が移築されたもので、世界的巨匠の作風をリアルに体験できる歴史的建築物。ちょうどこの春に現在の「帝国ホテル 東京」の再度の建て替えが発表されたばかりです。創設者の一人は新紙幣の話題で持ち切りの渋沢栄一ですので、これから何かと注目を集めそうです。

浮世絵の収集でも知られるライトは、日本文化に関心を寄せていたようですね。明治26年(1893年)に開催されたシカゴ万博に足を運び、平等院鳳凰堂を模した日本館を見た若き日の彼は、約30年後、その印象を日本での仕事に活かすことになったそうです。ひと目



見たら忘れないような素晴らしい外観には、言われてみれば、確かにそのエッセンスを感じますよね。それに加えて、建物を彩る素材にも、日本の情緒が息づいています。

まず、使われているレンガに注目です。愛知県常滑市の帝国ホテル煉瓦製作所で専用に作られたもので、「すだれレンガ」と呼ばれているとか。5ミリほどの間隔で刻まれた縦縞は、すべて職人の手作業による仕事。実に味わい深いですね。

レンガとともに重要な役割を果たすことになった、単純ながらも細かな彫刻が施された「大谷石」と呼ばれる石材は、栃木県産の軽石凝灰岩。ライト建築の魅力のひとつに空間の奥行きが豊かさがあありますが、この建物ではまさにその空間演出に大きく貢献したわけですね。調べてみると、古墳時代には横穴式石室にも用いられていた歴史ある素材のようで、ライト建築への採用によって一気に有名になったとか。館内を歩き回るだけでも楽しそうですね。

ライトはこの作品に尋常ではない情熱を注ぎましたが、その結果、大幅な工期遅延や深刻な予算超過を引き起こします。協議も虚しく、完成を待たずしてライトは任を解かれます。ようやく漕ぎ着けた完成披露パーティの当日、あの関東大震災が発生。ご存じの通り東京は壊滅的な被害を受けますが、もとは海だった軟弱な地盤を受けて粘土層に浮かぶようなフローティング基礎が採用されていたこともあり、ほぼ無傷で生き残ることができたとか。

多くの窓にはステンドグラスが施されていますが、あの独特の色彩感が抑えられていて、まるで外の景色がひとつの作品のように見えるように工夫されています。また、穏やかな外光が差し込むように計算

されていて、どの場所においても居心地よく感じられるようにという細やかな気遣いに満ちた設計であることが分かります。この屋内と屋外のつながりも、ライト建築の大きな特徴のひとつです。

…と、こうして文章に起こすと平坦な説明になってしまいますが、実際の映像は実に見応えがありました。フランク・ロイド・ライトの名声はぼんやりと知ってはいましたが、その情熱と力量に支えられる魅力的な建築は、細部

に至るまで数学で風景を描くかのような精緻感。動画ではライトの名作が情緒たっぷりに紹介されていて、心が揺さぶられるような感動を覚えつつ、「これは改めて勉強したい」と思いました。



明治村の多彩な建築物を現地気分で観賞!

映像を見終わってその余韻を楽しんだ後は、明治村全体の紹介となる【博物館明治村ぐるっと一巡りオンラインツアー】の鑑賞です。こうして気の赴くまま、任意のタイミングで質の高いオフィシャル映像を観られるのですから、凄いい時代になったものです。

明治16年(1883年)に完成し、日本の近代史の重要なワンシーンとして今に語り継がれる「鹿鳴館」。欧米諸国との外交の舞台として建設され、華族の象徴ともなったこの名建築は、三島由紀夫の戯曲でも有名ですね。昭和15年(1940年)に保存を訴える声も虚しく予告なく取り壊されてしまいました。

これに衝撃を受けたのが、建築家の谷口吉郎博士と、元名古屋鉄道株式会社会長の土川元夫氏。ふたりは、旧制第四高等学校で机を並べた同窓生でした。谷口氏自身が初代館長を務めた博物館明治村は、文化的価値が認められる明治建築15棟を犬山市の入鹿池付近に移築する形で昭和40年(1965年)にオープンした大型施設。その後、高度経済成長期の都市開発に伴って取り壊される古い建物が増えましたが、積極的に移築を受け入れた結果、開村から10年後には40棟を数えるまでになりました。愛知県を代表するテーマパークとして親しまれている現在は、明治から昭和初期に建てられた本物の歴史的建造物64件を展示中。重要文化財11件を含み、さらには蒸気機関車や京都市電の動態展示も行うなど、文化財の保存に大きく貢献しています。

今回のオンラインツアーでは、明治村の建築物から選りすぐりの十数棟が紹介さ

れました。私も訪問したことがありますが、まず広大な敷地からして圧倒される思いでしたので、名建築をひとつずつ解説付きで巡ることができるのは、まさに贅沢なひとときとなったはず。というわけで、ここでは、今回のアーカイブ動画の鑑賞体験で個人的に印象に残った3つの建築物をご紹介します。

まずは、聖ヨハネ教会堂。明治40年(1907年)、京都の河原町通りに建てられた教会堂なのですが、興味深いのはその構造。1階はレンガ造り、2階は木造、そして屋根には軽い金属板が使用されています。これは、地震が多い日本の事情に合わせたものと言われているそうです。その意味では、その後、大いに発展する耐震建築の走りだったのでしょうか。

歴史的建造物が有名ですが、明治村が収



集・保存・管理する資料は、大小合わせてその数3万点超にも及びます。この教会堂に設置されているオルガンもそのひとつ。明治31年(1898年)頃に米国ミシガン州のメーカーが製造したリードオルガンなのですが、何しろ寄贈を受けてから半世紀以上が経過しており、いまではその音色を聞いた経験を持つ人がいなくなってしまいました。

そんなわけで、2018年にクラウドファンディング企画を実施。丁寧に修復して当時の音を蘇らせようというプロジェクトは多くの共感と資金を集め、実際に修繕に成功したそうです。このサイドストーリーだけでも、音楽ファンの方なら身を乗り出すのでは。ぜひ現地でも耳を傾けてみたいものです。

続いては、第12代・第14代内閣総理大臣にして「最後の元老」としても名を馳せた西園寺公望の邸宅です。もう、聞いただけでも興味津々ですね。

ひと目見て歴史の重みを感じるこの建物。内部の設えも実に上質な様子で、順に眺めるだけでも時代を偲ばせる魅力に満ちています。興味深いのは、風呂場に設置された呼び出しボタン。現代で言うセキュリティシステムですが、当時の要人の邸宅らしさがうかがえますね。



ひとつ感心させられたのが、二階からの眺望。明治村に隣接する人工池・入鹿池を望むことができるのですが、これは移築前に広がっていた駿河湾の眺めに見立てているそうです。なるほど、ただ漫然と建物を移動するだけでは、その本質を發揮できないことがあるわけですね。このエピソードだけでも、明治村の真摯な運営姿勢が伝わってきます。

最後はこちら、大阪・池田に建てられた芝居小屋。客席は升席で、周囲を提灯が囲み、当時の観劇シーンがそのまま再現されています。ぜひ写真をご覧ください、どうですか、この臨場感！じっと見つめていると、開演前の高揚感に包まれ

るような錯覚を楽しめそうです。

花道の下に地下通路があり、入り口の上にある楽屋から舞台袖へと繋がっているそうです。映像では、その通路の様子も見ることができました。これもぜひ体験してみたいところですね。観客気分と役者気分、両方を堪能できそうです。



いかがでしたでしょうか。今回は2本の映像を鑑賞したのですが、いずれも単なる建築物の紹介にとどまらない、ずっしりと余韻が残るような感動を覚えました。歴史的建造物の担い手たちの素晴らしい仕事はもちろんなのですが、加えて「残そう」「伝えよう」「次代に継ごう」とする人々の熱意が胸に迫りました。それは、あらゆる博物館に共通する業務姿勢でもあるのですが、日々の努力をオンラインで紹介できるITの威力を改めて実感する機会ともなりました。

 **博物館明治村**
<https://www.meijimura.com/>

利用者の目で見えた オンラインツアーの魅力

今回、いくつかのオンラインツアーに参加してみて、心から満足感に浸ることができました。それは、最良目ではなく掛け値なしに素晴らしい体験で、万人に勧められる内容だったと確信しています。

日常的にミュージアムを訪れる身として日々感じるのは、学芸員の力です。館内で直に話を聞くと、展示の鑑賞体験は確実に深まり、心に刻まれます。逆に、彼らの肉声で知る資料の背景情報やサイドストーリー、補足エピソードなどは、目の前に「本物」があるからこそ際立つのだと納得していましたが、今回のツアー体験で、一部、考えを改めることになりました。なぜなら、画面を通しての巡回では、そこに実物が無い分だけ解説がひとまわり充実しているように感じたからです。

「同じものが見えている」とは言え、実物と映像ではやはり情報量が違うもの。それを補うためでしょうか、オンラインツアーではより多くの説明が加えられ、それが安定した形で脚本化されて「物語性」が増しているように思いました。その場の空気を共有していないからこそ、「何とか伝えたい」という熱意そのものが伝わってくるのです。

モニター越しの擬似体験ではありますが、完成された物語としての解説ぶりは、むしろ新

鮮なサプライズでした。また、オンライン化、映像化にあたってのストーリーメイキングは、日々の来館者サービスにもフィードバックできるのでは。今回、東京～長野～滋賀のミュージアムを1日で、しかもリアルタイムで「ハシゴ」という超時空体験の楽しさも含め、いろいろな意味を感じました。

オンライン時代の 新たな施策となり得るか

さて、こうして高揚感に包まれたのは、私だけではありません。今回、ツアーを実施した側であるミュージアム関係者からも「新たな普及事業としての可能性を感じた」という声が聞かれました。

今回、私は1日で2つのイベントに参加しましたが、もしもこの種の企画が多くの館で開催されるとしたらどうでしょう。毎週、何本も開催される状況になれば、ミュージアムファンが喜ばないはずがありません。最近ではWEB広告が活発で、どこもかしこもPRに明け暮れていますが、これ以上に効果的なアピールもそうはないのでは。地理的な隔たりがゼロになるという意味でも、オンラインツアーは新たなファンづくりの切り札になり得るかもしれません。

もちろん課題もあります。今回ご紹介したオンラインツアーは、実は、いずれも文化庁の「文化芸術収益力強化事業」として実施され

たものです。ある程度の双方向性を確保するという視点から参加者は20名ほどに絞られていたのですが、この事業のタイトルにある「収益力」を考えると十分とは言えません。PRではなく、「第2の来館」として捉えらるなら、採算的に現状では厳しく見ざるを得ない組織もあるでしょう。ただ、PR効果をはさんでの収益アップという考え方が許されるのであれば、その後には足を運ばせるだけでなく、オンラインストアでのグッズの販売につなげるというスキームも描けます。

もちろん、魅力的なコンテンツを目指すのであれば、それなりの準備が必要です。実際、私が参加したツアー、観賞したアーカイブのクオリティを目指すのであれば相当な労力が、場合によっては相応のコストも必要になるでしょう。特に、リアルタイムのオンラインツアーはリアルイベントにも等しい人員体制や事前準備が必須となりますので、この負荷はそう簡単に吸収できるものではないと考えます。

過度な負担をかけることなく、魅力的なツアープログラムを練るノウハウ。なかなか難しい話ではありますが、博物館には「学芸員の力」が宿っています。運営の知恵やコツは横断的に共有できる部分でもありますので、うまく整備すれば業界全体の活性化につながるかも。課題は多いですが、将来に向けての期待に胸が膨らむ体験となりました。

ミュージアムITトピック



ポケット学芸員 導入事例

島根県松江市 松江歴史館

大正と令和、先輩・後輩の百年コラボ！



最近、ポケット学芸員の活用館ではナレーションを地元高校生に依頼する事例が増えているのですが、百年の時空を超えたコラボというのは話題性もバツグン！【開催期間＝令和3年4月16日～6月27日】

I.B.MUSEUM SaaSの展示ガイドアプリ「ポケット学芸員」は、コンテンツの入れ替えがとて簡単。その柔軟性を活かして地元の学生などをナレーターに起用する館が相次いでいます。今回ご紹介する事例もそのひとつなのですが、さらに一工夫を加えた「時空を超えたコラボ」が話題を呼んでいます。

注目の企画展は、松江歴史館の『旧制松江高等学校 一松江で学び、暮らした学生たち』。旧制高等学校とは、明治から昭和前期にかけて、帝国大学など旧制大学への進学のための予備教育を行った学校を指します。旧制松江高等学校は現在の島根大学の

前身にあたり、島根県で初めての高等教育機関として、大正9年(1920年)に設置されました。翌年の4月16日には初めての入学式が執り行われ、未来への希望に胸を膨らませる若者たちを迎えています。

この企画展は、そんな「百年前の地元の学生たち」の様子を紹介する非常に興味深い展覧会。展示室内ではポケット学芸員を活用した音声ガイドが配信されているのですが、ナレーターを務めているのは、実は島根県立松江北高等学校の生徒の皆さん。松江北高校の前身は旧制松江中学校で、その中には旧制松高へ進学した生徒もいたというこ

とで、「大正の先輩たちが残した貴重な資料を、令和の後輩が解説する」という歴史的コラボが実現したことになるのです！

日本語版のナレーションは同校の放送部が、英語版はコミュニケーション部が担当。ちなみに、旧制松高は校舎の建設が間に合わず、しばらく旧制松江中学の建物を間借りしていたそうですので、名実ともに「直系の後輩たちの作品」と言えるわけですね。さまざまなアイデアが続々と実現中のポケット学芸員ならではの好事例です。

 **松江歴史館**
<https://matsu-reki.jp/>

ミュージアム | T屋さん、現場を往く！



これは楽しい！ 大学ミュージアムならではの知的体験 慶應義塾ミュージアム・コモンズ KeMCo

2021年4月19日(月)、新たな発想で知の交流を生み出す注目の大学ミュージアムが開館しました。慶應義塾ミュージアム・コモンズ「KeMCo」は、同学に関わるあらゆるコミュニティが文化財を基点として交流する場であり、学内に存在するコレクションが相互に交流しながらデジタル空間を通じてグローバル・ネット

ワークに接続する場。こうした理念は、館内の随所に用意された「仕掛け」へと反映され、刺激に満ちた空間が形成されています。

今回は、開館の前週に開催された内覧会にお邪魔しました。大学ミュージアムらしい知の飲み口に満ちた展示の中から、個人的に印象に残った3点をご紹介します。

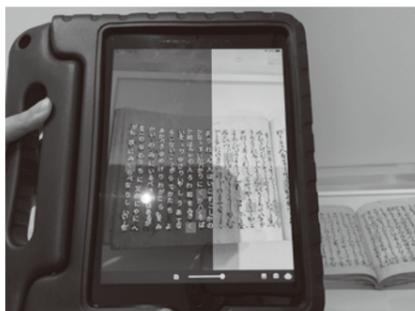


これなら古文書もスラスラ読める!?

『交景：クロス・スケープ』と題されたランド・オープン記念企画。展覧会『文字形—AIが開くくずし字の風景』では、いろは歌などでも馴染みのくずし字を認識するAI『KuroNet(クロネット)』を活用したアプリ

『みを(miwo)』が提供されていました。くずし字が現代の文字に変換して表示できるだけでなく、同じ文字がハイライト表示されるなど、便利な機能が満載。これなら、難解な古文書もスラスラ読めるようになるかも。

アプリは人文学オープンデータ共同利用センターが開発中で、まだ一般公開はされていませんので、現時点で体験できるのは恐らくここだけ。今回の利用者の声も参考にしながら、さらなる改良を目指すそうです。



作品情報をLINEでゲット

次はこちらです。『Ask KeMCo(アスク・ケムコ)』は、展示解説にも採用されていたLINE Botによる作品情報配信システム。いまや老若男女問わずコミュニケーションツールとして定着したLINEですが、Ask KeMCoは作品の番号をLINEのトークに入力すると、画像とともに詳細な解説が返信されてくる仕組みとなっています。

質問すると答が返ってくるというシンプルな機能ながら、気軽にキャッチボールを楽しむ感覚が新鮮。LINEを利用していただければ新たなアプリをインストールする必要もなく、とても手軽に使えます。なお、送られてきた作品情報は、LINE上で家族や友人にシェアすることもできます。



ワクワク感たっぷり！ KeMCo Studio/O

今回はデジタル展示スペースを兼ねている建物1階のエントランスホールは、大階段で2階のオープン・デポ(ガラス張りの収蔵庫前室)、そのひとつ上の展示フロアへと続きます。4階はオフィス、5階は実習室、最上階の9階にはカンファレンス・ルームと充実した設備を誇りますが、もうひとつのハイライトが8階の「ケムコ・スタジオ」です。

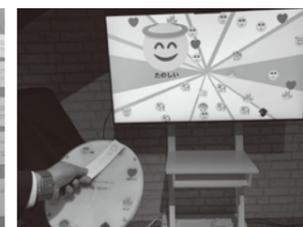
ローマ字表記の I/O は、そのまま入出力(Input/Output)を意味します。デジタルアーカイブの作業を行うことができる機材だけでなく、3Dプリンターやスキャナー、レーザーカッターまで揃っていて、まさにデジタルとアナログによる創作の場といった趣。この日は、実際にここで作られた菓をいただいたのですが、NFCタグが付いていました。このタグ、実は1階のデジタル展示で読み取れるという仕掛けになっているのです。いや〜、アイデア満載ですね！

本格的な工房のように多様な器具・工具が並ぶスタジオ内。案内してくれたのは、慶應義塾大学に在籍する現役の学生さんです。芸術や美術史を学んでおられるのかと思いきや、何と畑違いの法学部。「この施設で、自分が通う大学の奥深さを実感しました」と目を輝かせる若者の姿は、大学ミュージアムならではといったところでしょうか。

用意された端末では、デジタルで制作された作品を見ることができ、ほか、「Keio Object Hub」を検索できます。日本で最も長い歴史を持つ総合学塾たる慶應義塾では、図書館や研究所のほか、各学部や一貫教育校など学内のさまざまな場所で専門性豊かなコレクションのデータベースが編まれてきました。「Keio Object Hub」は、展覧会や講演会など学内で展開する文化関連活動とこれらの情報を結びつけることで、同学のアートとカルチャーを一覧できるポータルサイト。インターネットでも閲覧できるので、ぜひご覧ください。

こうして駆け足で紹介するのが申し訳なくなるほど「知的な刺激の宝庫」という印象のKeMCo。今後は学内外のさまざまな人々が集まり、自由な発想で交流できるオープンな場所を目指すそうです。

KeMCoは、「創造的な空き地」というコンセプトを掲げています。昭和に幼少期を過ごした方なら、交流の場としての「空き地」をご記憶かと思えます。優等生も、足が速い子も、絵が上手い子も、子どもたちが自然に集まる、あの空気感。KeMCoには、本格的に創作する人にはもちろん、調べものを進めている人にも、なんとなく立ち寄ってみた人にもピンと来るインスピレーションが溢れています。人々が集う場



所としてのその姿は、大学ミュージアムの模範を示しているように感じて、そんな意味でも嬉しくなりました。

4月19日から始まった『交景：クロス・スケープ』は、6月18日まで開催中。詳しくは公式サイトをご覧ください。



慶應義塾ミュージアム・コモンズ KeMCo
<https://kemco.keio.ac.jp/>